



日本大学 三島同窓会大報

第 7 号

昭和52年12月1日
静岡県三島市文教町2
日本大学三島同窓会発行

三島学園開設三十年を迎える

母校日本大学三島学園は本年をもって開設三十年を迎えた。六月十五日が開設の日であるが、記念式典は十一月一日午前十一時から

三島学園第十一号館において挙行された。式場には鈴木総長を始めとされた地元

大学本部、各学部の役職員、三島校舎教職員・学生代表のほかに、長谷川三島市長を始めとした地元

来賓、後援会役員、校友会三島支

部、同窓会代表等百八十名が出席した。同窓会からは種房・奥田正

副会長が出席し、三島学園卒業・移行生の代表として種房会長が

「三島学園三十年の発展を祝い、新学部設置を熱望する」祝辞があ

った。式典の後、正午から新体育馆に、五百余名の来賓・教職員が出席し祝賀会が盛大に挙行され

た。同窓会からも幹事並びに在学中各期の学生団体委員長であった。同窓会からも幹事並びに在学中各期の学生団体委員長であった。同窓会からも幹事並びに在学中各期の学生団体委員長であった。



記念式典

昭和五十一年度 総会開く

同窓会昭和五十一年度総会並びに懇親会は、十一月三日午後四時から母校記念館に百二十余名の同窓生出席のもとに開催された。(関係記事13頁)

同窓会記念事業で 文学座を公演

三島学園開設三十周年を記念する同窓会事業の一つとして、文学座による『ハムレット』公演が、十月六日午後六時から三島市公会堂で開催された。当日は九百名収容の会場も満員の大盛況であった。(関係記事12頁参照)



同窓生のなかには久々の母校訪問で、発展する母校の姿に目を見はつた者も多かった。

日本大学三島学園が、昭和二十一
年六月十五日に創立されてよ
り、今年で満三十年を迎える事
は、誠に喜ばしいことであります
。したがいまして、私が旧制三
島予科の門を潜ったのは、早いも
ので今より二十九年前となるわけ
です。未だ戦後の混乱治りやらぬ
昭和二十二年四月、私は郷里北海
道より笈を負ってやつて來たわけ
でした。

今日のように堂々と聳える校舎
もなく、廣々とし
た旧陸軍の練兵場
あと、ぼうぼうと
夏草が茂り、雨で
も降ろうものなら
泥沼と化した校庭、旧制予科生の
特徴とも言うべき高足駄、下駄履
が多かった。木造兵舎の改造校舎
で、この「ガラガラ」、「ダッダ
ーダッダ」の反響音で、休み時
間ともなれば大賑いになる。学校
側は、苦肉の策として此の板張り
廊下にアスファルトを引いたりさ
れて、騒音防止に努力された。
理解するのも難しい程、食生活
に貧窮していた。一部の寮生活を
している人も、また、一般市中に

また、当時は現在の若い人々が下宿している人も、此の食糧不足の状態には、変わりなかつた。苦めし、おじや、すいとん、雑煮ひのうどん、ひもじい日々が続いた。私など此の時代の後遺症のか、薩摩芋を見るだけで胸一杯で食欲も湧きません。

しかし、今静かに考えますと、戦後誰もが困つてゐる時代でしたし、現在でもその面影を残してゐる様に、三島と言う街は、保守的で優雅な所です。戦前わずかに一個旅団が駐屯して、と言つても街そのものは静かな街で、且つて東海道の宿場街として殷賑を極めた頃の面影が、消え去つた頃、突然日大が進出して來たのですから、今日の様に学生下宿に解放する様な間取り、生活様式の余裕もなく、学生の我々も難波しましたが、街の人々も驚き慌てた事には間違ひありません。そこへもつて来て、未曾有の食糧難時代ですか

ら、一体どちらが受難なのか判りません。

今日、日大三島学園よりは、その数にして此の三十年間に約四万六千人余の人々が移行なり、卒業して居ります。旧制予科約二千余名、教養部約三万五千余名、短期大学約九千余名—此の人達誰もが何らかの形で此の街の市民の人々と交渉を持ち、関係づけをもつて三島を出て行つて居ります。三島学園に学んだ者のそれぞれが、人と共に歩んだ

三十年を共に歩んだ

三島市民の皆様へ感謝

今日のようすに堂々と聳
もなく、広々とし
た旧陸軍の練兵場
あと、ぼうぼうと
夏草が茂り、雨で



種房

今日のようすに堂々と聳える校舎もなく、広々とした旧陸軍の練兵場あと、ぼうぼうと夏草が茂り、雨でも降らうものなら

島子科の門を潜ったのは、早いもので今より二十九年前となるわけです。未だ戦後の混乱治りやらぬ昭和二十二年四月、私は郷里北海道より笈を負ってやつて来たわけでした。

また、当時は現在下宿している人も、の状態には、変わりめし、おじや、すいのうどん、ひもじいた。私など此の時代か、薩摩芋を見るが食欲も湧きません。

の若い人々が此の食糧不足になかった。莘
とん、雑煮込んで日々が続い
の後遺症な
けで胸一杯で
影を残してい
考えますと、
る時代でした

ら、一体どちらが受難なのか判りません。

今日、日大三島学園よりは、その数にして此の三十年間に約四万六千人余の人々が移行なり、卒業して居ります—旧制予科約二千余名、教養部約三万五千余名、短期大学約九千余名—此の人達誰もが何らかの形で此の街の市民の人々と交渉を持ち、関係づけをもつて三島を出て行って居ります。三島

の若者達にとって、有難かったとか。その後の人生を歩むにあたり、この時の経験が、機会あるたびに役立っている話を、同窓の間で随分と耳しております。

私達は、此の三十年間の日本大

学三島学園の、素晴らしい発展を讀えると共に、遠く故郷を離れて此の三島の地で、青年期を過ごす学生達のために、陰になり日向になつて、此の若者達を受け容れ励

同窓会幹事会で決定

（文科・家政科）

文科同窓会並びに家政科同窓会の会員名簿が十一月発行された。いずれも同窓会の三島学園開設三十周年事業の一環として発行されたものである。

(日本大學三島同窓會長)

間ともなれば大賑いになる。学校側は、苦肉の策として此の板張り廊下にアスファルトを引いたりされて、騒音防止に努力された。理解するのにも難しい程、食生活に貧窮していた。一部の寮生活を

日大が進出して来たのですから、今日の様に学生下宿に解放する様な間取り、生活様式の余裕もななく、学生の我々も難渋しましたが、街の人々も驚き慌てた事には間違いありません。そこへもつて来て、未曾有の食糧難時代ですか

持つたことでしょう。三島の街の人々も、ある時は未だ幼い学生として、また、時には未経験な大人として、私共学生に時に優しく時に厳しく接してこられて來たでしょう。日大生に対するその様な

三島学園の縁の下の力持ちとも
言うべき三島市民の皆様に、改め
て厚くお礼申し上げます。

(日本大学三島同窓会会長)

文科同窓会並びに家政科同窓会の会員名簿が十一月発行された。いずれも同窓会の三島学園開設三十周年事業の一環として発行されたものである。

三十周年事業を 同窓会幹事会で決定

学園開設三十周年記念式典が、去る十一月一日午前十一時から新築落成したばかりの一号館の講堂で、盛大に挙行されました。当日は、雲一つなく晴れわたった秋に、悠然とそびえ立つ富士山も、銀色に輝く新雪を頂き、今日のめでたい日を喜んでいるかのように感じられました。大学本部からは鈴木総長をはじめ、高梨、小堀、金井の三副総長、紫田副理事長、理事、各学部長、本部並びに各学部の幹部の方々、地元からは谷川三島市長、後援会、同窓会、校友会の役員をはじめ、先輩同窓生、教職員、学生代表等多数のこ列席をいただき、何とも言葉では言い表せない喜びでした。引き続いだ新体育館で催された祝賀パーティーは、五百余名の方々でうなり、和やかな交換をよぎり、まさに感慨新たなものがあります。

昭和十八年五月、農学部予科が文部省から認可になり、新たに、六会（小田急線六会駅下車）に開設されたのでしたが、その年の十二月二十二日に、私は急に事務主任として発令され、渋谷区千駄ヶ谷の自宅から通勤するようになります。創設間もなく、また、第二次大戦中のことでもあり、設備品など整わず、学生は勤労動員で、皆工場に出勤する、農場は雑草がのび放題、全く大変な毎日でした。二十年八月、終戦を迎えたのであります。わが大学も、かなりの戦禍を蒙りましたから、復員

士山を控えて環境に恵まれておらず、将来、素晴らしい学園になると思うから、大変だろうが三島へ行って、頑張つてもらいたいとのお話をでした。その時、私はふと心中に、六会の農学部予科建設の難波であったことなど思い出されて随分躊躇しましたが、命に従うことにになりました。

五月一日付で事務長の辞令が発令されましたので、私は三島へ行き、当時、ひしや旅館（現・三島プラザホテル）の一室に、三島予科長兼任として発令された世田ヶ谷の幹部の先生と泊つておりました。そして、近日中に連絡する



新たに、呉文炳先生が総長に就任されました。二十一年の一月二十八日でした。吳総長は、前総長岡先生から引き継がれた計画に従い、経済学部長青木孝義先生と三島を訪れて、現学園の道路向うの野戦重砲兵第十部隊跡地を、つぶさに視察され、ここに三島予科を開設する端緒をつくられたわけです。

四月中、下旬頃かと思いますが、私は吳総長のお呼びをうけ、お目にかかりますと、三島予科の事務長になつて、同予科の開設に努めて欲しいと言われました。富士山を控えて環境に恵まれておらず、将来、素晴らしい学園になると思うから、大変だろうが三島へ行って、頑張つてもらいたいとのお話をでした。その時、私はふと心中に、六会の農学部予科建設の難波であったことなど思い出されて随分躊躇しましたが、命に従うことにになりました。

このように、教職員が学内に住居をかまえているので、学生達は朝晩見さかいもなく、押しかけるような状態だったわけです。従つて、教職員は、まるで二十四時間勤務のような有様でした。しかし、誰一人不平不満を言うものはありませんでした。寝食を忘れてとでも言いましょうか、日夜、情熱のありつけを傾けて、学生の教育指導に打ちこんでいたわけですね。そうした結果が、今日の学園のよい伝統として築かれたもの

学園開設三十周年記念にあたりて

鈴木昇六 (文理学部^{三島}顧問)

同窓会スタート余談

高 桑 日舞

(元文理学部三島経理長)



三島学園の三十周年をおよろこびするとともに、三十年には達していないが、共に発展してきた三島の同窓会。三島出身の諸君が、一年、二年または三年と短い在籍にもかかわらず、みんな一つになって三島学園のために、一人一人の会費は少額であっても、会をつくり、会では他学部には見られないものに完成したことを、今更ながら然し、発足当時振り返ってみると、当初の数年間の苦労は大変であった。会の幹部になつた諸君はいらっしゃったらしいが、毎年三島を終え進学してゆく諸君に納得していたとき、当時は二百円の会費を集めることに如何に苦労したか。これは当時の瀬川学生課長の苦労もさることながら、会計課では別の領収書を発行していたので、学費を納入する際一人一人にその趣旨を説明していた。よく理解してすぐ納入する者は何パーセントかごく少數で、大部分の学生は知らぬ振りをして帰っていました。中には強制ではないのだろう、なんて捨て台詞の一つも言って帰る者もいた。こんな事を数年続けたが、女子職員では徴収が困難なので、私を始め会計課男子職員を総動員して窓口に立ち、一人一人に説明したものだつた。

数年後、学費徴収と同時に印刷する時期が来てほつとし、金額的にも伸びてきた。先日も、当時より在籍している会計の者達と話をしたが、「学費と共に納入すること

になるまで、本当に苦労したな。一度その当時の納入者名簿でも見ようか。」などと話をして。案外、卒業後同窓会員だと言つてよく顔を出している者の中に、会費の未納者があるのではないか。どうか。

当時の苦労話はこれ位にして、今ここまで発展、成長した同窓会です。大切にしていただきたい。金額を増すことばかり考えないで、貨幣価値の変動の激しい現代です。やりたいこと、やることがあれば、在学生などの意見も聞いて大いに活用すべきではないかと思われる。ただ、特定の人による計画・流用は、特に慎んでいただきたい。それは当初苦労して作り上げた会なればこそである。

もう一つのお願いは、今では三島出身者は全員同窓会員である。したがつて、みんなで諸計画に参加し、三島学園の発展に大いに力になつて欲しいことである。私も定年近くなつて転勤を命ぜられ、止むなく三島学園を去りました。然し、三島の地を去ることは出来ず、終に今年の春定年を迎えた。

三十年前の三島学園を思い出すとき、特に開校式前の数か月、職員としては私唯一人で、食料も無く昼間は「ひしや」を舞台として仕事をもつて、夜は毎夜宿直をしながら、帳簿などを整理するという数か月、とても書き表わすことも出来ません。大学発行の二十年誌・三十年誌と立派な本は出ていますが、六月中旬以降を中心とした記事ばかり。開校式に学生諸君を始め教職員が天から降つても来たのでしょうか。それまでの苦労と困難は考え起こすだけでも涙が出来ます。

この事に触ると、私と一緒に手伝つて天から降つても来たのでしようか。それまで心より感謝するものです。同窓会の当初の思い出と共に、学園当初の愚痴と言お許し下さい。

三島開設三十周年記念号に寄せて

沼尻正隆

(文理学部教授・中国文学)



三島の学園が創設されてから今年は三十周年を迎えた。今更のように歳月の迅速を思うと共に、すばらしい学園に発展した現況を見ると、全く今昔の感が深い。

私が三島の学園にお世話になったのは昭和二十二年から三十三年まで足かけ十一年の間であるが、それはちょうど学園草創の時期であり、特に戦後まもない物資の乏しい頃で、今では考えられないほど施設も粗末であった。しかし反面、学生も教職員も新しい学園の建設に意欲を燃やしていたし、戦争の空白を取り返えそうとする学問への情熱もさかんで、それだけ毎日が充実していたと思われる。

軍隊兵舎を改造した教室には天井もなく（隣りの教室の講義が混線して、声の大きさなどは随分周囲に迷惑をかけた）小さく黒板しかなかつたし、窓はガラスが貴重で、板を打付けたところもあった。講堂は多くの車輌庫の跡で、ただ演壇があつただけであつたし、裏の運動場には馬舎が長く

幾種も列んでいて、夏は雑草が背丈よりも高く生い茂っていた。事務所は集会所の跡で（今の記念館である）、前庭は春になると美事な桜の並木になつた。教員宿舎の双

秀寮は旧聯隊本部で、よく東京からかよつて自炊生活をした。兵舎の跡が一つ一つに思つたものである。予科が新制教養部に変り、ようやく体制が整つて、入学式、全学ビックニック、大学祭移行式などの行事が年を逐つて伝統となつた。その間、教職員も学生も苦楽を共にしたものであつた。

朝夕仰ぐ富士の秀峰は今も変わらないが、まだ清冽な湧水が町のどこにも見られたし、水泉園、小浜池、大社の森など安らぎを与える町の静けさがあつた。そして何よりも温かい人の情があつた。このような環境の中で、共に学び共に語らいつつ築いた青春の友情は、永遠に忘れる事のない人生の尊い絆であろう。

時代がどんなに変つても、美しい我々の心の故郷である学園がいよいよ繁栄するよう、三十年の歴史を心から慶賀すると共に、その前途を祝福し、さらに同窓諸君の一層の御健闘を祈念するものである。

山 本 偕 一

(文理学部〈三島〉教授・化学)



私が三島学園の教壇に立つてから今年で

丁度二十五年ほどになる。教え子も何人か

は大学の助教授クラス、会社役員なども多

くなつた。私は工科（今の理工学部）の学

生とブレメ（医学進学課程その後は岩手医

大）の学生に化学を担当してきた。当時の

私は三十代の半ば頃の大兵氣鋭の教授であ

つた。年令の多い学生もかなりいた。ブレ

メの学生に三十才のものもいた。その頃の

土木科の学生で、六尺近い大男で無精ヒゲ

で眼光の鋭い学生がいた。O君と呼ぶこと

にする。

O君も三・四才は年かさであったが、夏

休みの終わり頃突然に担任の我が家を訪れて、「先生！」ボクは大学を止めます。大

阪へ行きます……」と藪から棒のごとき口

上である。その決意のほどを折角完成した

宿題の膨大な数の製図のケント紙を破棄してきないのである。ヤクザ刈の空手二段のこ

の巨漢の迫力は相当なものであった。私は

初めて教師の試練に会つた。しかし私の気

魄と誠意が次第に通じたらしく、私の示したレールを徐々に歩いてくれるようになつた。二十年余を過ぎた今夏、また突然に彼からの電話があつた。「先生、奥様とぜひ私の新しくつくつた別荘に御来遊下さい：…」と言う。懇請に負け、老妻と旅立つたのである。

結婚以来はじめて夫婦での旅行であることも妙であった。

老妻とみちのくの旅夕焼す

この一句が自然に生まれた。盛岡駅から

家族総ぐるみの歓迎で別荘地の八幡平に迎へられた。桧の香がただよう湯舟につか

り、文字通り珍味佳肴のもてなしと、

山荘に酌むや老鸞雨に啼く

の二句めも詠めた。雨上りの翌日からは

秋田県境から陸中海岸へと岩手チベット地

帯を縦横に彼の運転するドライブ旅行となつた。途中で自分の会社のトラックとも時々それ違つたりした。各地でこの青年社長

の活躍振りを聞かされた。月余にわたる宮

古地域のタクシーのストライキ解決に男を

満喫し、それにもまして自然と人情の美しさに心洗はれた旅であった。教師冥利をつくづく味わつたのである。

（短期大学部家政科長）

堀 江 正 美

(文理学部〈三島〉教授・英文)



今まで取り立てて言うほどのこともない
と読み流していた箇所に、ふと心が引かれ
ることがある。次の引用はトマス・ハーディの短編小説からのものである。

「結婚の申し込みに応じ、蜜月を過ご

し、自分をふり返つてみる時期に達するま

では、夫の職業が彼を夫とするのに何らかの支障にならうとは考えてもみなかつた。

ところでの時期になると、暗がりで何か

ものに頼んだ人のように自分の得たものは

なんだろう—珍らしいものだろうか、あり

ふれたものであるうか、内に含まれている

ものは金か、銀か、それとも鉛だろうか、

邪魔物、あるいは土台石だろうか、自分に

とって何よりも大切なもの、又は何の価値

もないもの、いずれであろうかと、それを

心に思い巡らし、值踏みしてみるのだつた。」

結婚に限らず何事においても、やがて自

分を顧みる時期がくるもの、そして色々と

思ひ巡らしている引用の言葉は興味深い。

これはあわただしく結婚したのちに夫の

職業を嫌い、また夫の気質、特に趣味、嗜

みを嫌うのである。

好の点で著しく相違している自分に気づいた妻が軽はずみであった結婚への反省、後思案の言葉である。このようにハーディは暗がりで何かものに躊躇した人のように輕率な行為に走る人物をよく取り上げ描いている。しかもハーディの場合、その主人公たちが一旦犯した若氣のあやまちから、いくら立ち直ろうと努力しても、まるで宿命でもあるかのように破局へと導かれて悲運に泣く暗い感じをあたえるものが多い。

確かに不運の星のもとに生れ、不運を背負つて一生をすごしたように思われる人もいるであろう。しかし運は、本来自らの手で切り開くもの、努力して得られるもの、決して宿命的なものではない。若い人たちには、老年にはいつの間にか失せている、活力、弾力、浮力を持ち合わせている。多少の失敗、過ちに拘泥することなく、この若い力を十分に生かすことができたら、ぶり返つて悔いることはあるまい。しかしながら、大きな思わぬ失敗から免れるためには、後思案ではなく、いつも自分をふり返つてみること、「内に含まれているものは金か、銀か、それとも鉛だろうか」とものを見分け、「自分にとって何より大切なものの、または何の価値もないもの」いずれであろうかと判断する力が何より必要となるであろう。



私の近況

澤 直 和

戦後のあの暗い時代も、三十年もたてば、楽しい思い出として、のこっている、一つ一つも、毎号毎号に寄稿されて、読みつくされた感がありますので、『私の近況』と題して投稿することに致します。

私は昨年来、東京都中野区民の代表として、約一ヶ月間、中国を訪問する機会を得まして、上海・杭州・長沙・武漢・北京の各小、中、高、大学、医学院、病院、博

物館、展覧館、小年官、青年官、人民公社を見学し、又設営された会場での説明・討論会によつて、よりよく、新しい中国を知り、且た政党・政派の違いをのりこえ、過去の不正常時代が残した不幸な遺物や、幾多の障害をのりこえ、往来と、相互理解は大きく発展し、交流に新しい分野が開け、帰国報告会が各地で催され、友好交流は

益々拡大されることになりました。特に、私も、ライオンズクラブのメンバーとして、各クラブ例会での（中野・横浜・滋賀）『中国の現況』と題しての講演は、日本友好の高揚と友好運動の前進に寄与すること大であったと確信してやみません。長い三千年の歴史と、善隣友好の基盤の上に、平和条約早期締結を願うものです。

（昭21・22、予科在学中央歯研
代表取締役）

日大三島予科応援団あれこれ

近藤昭文



今日このごろ

山田莞爾

昭和三十三年春の入学ですか
ら、かれこれ十八年経ったことに
なります。当時十七才の少年も三
十七才の青年になりました。そし
て、二人の男の子の親になりました。

昭和四十六年五月より父の眼科
医院を継承し、第一線の開業医と
なりました。父母も健在でますま
ず一生懸命やって居るところです。
年月は経ちましたが、自分自身は、
学生の頃の情熱を持ちつづけて
いる積りです。診療のかたわ

ら、現在ボーリスカウトに関係し
少年達と楽しくやって居ります。
しかし、翌日疲れるのは、年？
のせいでしょうか。週に一度、福
島医大に眼科の講義に参り新しい
知識に触れ、また、若い先生達と
話し合う機会にも恵まれ、幸せだ
と思って居ります。教わっていた
ときはさほど感じませんでした
が、教えるという難しさを知りました。
自分自身の再教育をすること
ともなり、非常に有意義なこと
だと思います。

第一線の開業医にとっての卒後
教育の重要性が一段と必要な複雑
な社会情勢になつてゐる今、地道
に、息長く続けていきたいと考え
て居ります。

稿を終わるにあたつて、三島に
学んだことは、僕にとって本当に
有意義でした。良き師、良き友、
良き隣人に恵まれ、そして僕を包
んでくれた自然是余りにも雄大で
した。

イヤーストーム節を高歌放吟し、
その余勢で湧水の流川で寒中游泳
をしたり薪、炭なきため墓場の塔
婆を失敬し、飯を炊き、暖をとつ
たりして、皆様に御迷惑をおかけ
した事は謙虚に反省しておる一人
です。私も過ぎし三十年前の明暗
を把握し、この暗い過去を良き導
師として、日大応援団をば以つ
て、微々たる存在乍ら名古屋の地
にて、高校生の先頭に立ち、心温
い脇役の人物であれ、縁の下の力
持ちであれ、そしてお互に相手の
立場を尊重し合い、「つくす」事
の出来る人間となり、他人の不幸
に対し素直に涙を流し、他人の喜
びに対し自分のものとして喜べる
様な人物となれと頑張っておりま
す。

最後に母校日大がよりよき大学
に発展することを心から祈つてお
ります。

（昭21・22、予科在学、愛知県享
栄高校教頭）



静岡県スポーツ祭（草薙競技場）昭22.6.30

さだめと共に



高田菊平

ない。そんな気持ちで勤めて来たかいあって、同級生にくらべて、負けていない自分に、ほこりを持っている。

(昭41・42 建築科在学、長泉町役場水道課)

る。三島へ帰つてから約八年になるが、その間にもしばしば地の利を生かして学園を訪れることがで

き、先生方と親しく接する機会ができることがある。

私はこういう人生の流れとい

うものを、つくづく人の縁というか運命というか不思議だなあと思

う。いくつかの節がありいくつかの道があり、多岐にわたつていよ

うとも、その中の一つしか選ぶことができない人生の中で、ただそ

三島の町と、この三島の学園と私は、どうも縁の深いものであ

るらしい。高校がこの学園の中に新設されたときに、第一期生として入学し、その当時から大学の先生方にも講義をうけ、高校を卒業後また同じ学園の大学一年生として教養課程を学ぶこととなつた。

そして一旦はこの三島の地を離れていたものの、また縁があつてこの三島の地にもどることになり、今は住居を、仕事の場を三島にかまえることとなつて現現在であ

う意識することなくいつのまにかこうなつてしているのであるのだか

ら。

私が大学一年生として入つてから、既に十五年がたつたのかと思

うと、歳月のたつ早さが、今さらのように身にしみる思いがする。

私はいつまでもこの学園とのつながりを大切にし、今後の人生にも十分に生かしてゆきたいと考えている。

(昭36、理工学部在学、ニューヨーク工業専門取締役)



ほ
こ
り
岩
崎
和
夫

「学生時代」この四文字を頭に浮かべ、九年前をふり返つて見ると、数々の思い出が浮かんで来ます。講義の時間になると、途中抜け出す事しか頭になかった事、又出欠の代返を、二、三人分引き受け見つかった事、製図を友達に書いてもらつて提出した事、その様にして数々の悪事を働き、ほこり？高き自分であつた。

友達より強くなりたい一心で入ったクラブ（空手部）。きびしい、つらい練習が毎日続けられ

た。雪が積つてある道路も、早朝素足で走つた事、部員一人のミスのために、全員が罪せられ、又上級生には一言でも反発すれば、校舎の四号館前のコンクリートの上に正座し、自分の体が自分のも

のでなし、死にものぐるいで耐えられたのは、数人であった。この中には自分があつたのも、ほこり高き人抜け、二年生に進級するまで耐えたのは、数人であった。この中には自分があつたのも、ほこり高きと自称している。

卒業と同時に、地方公務員として勤務する事になつたと、友人に話すと、お前の様なやつは勤まるはずがない、絶対むりだと、冷笑された。しかし学生時代どんな優等生であつても、社会に出れば、一步からのスタートである。スタートが同じならば、どんな苦労でも自分はやつてやる。絶対に負け

時間であつたと思われるが、自分には一番苦しい時間であった。入部する時は二十数人であったが、厳しい練習のため、一人抜け、二

万国博覧会が開催された昭和十五年、私は法学部へ入学した。第一年次の校舎は「三島校舎」であった。熱海よりもっと西、箱根山の向こう側とはと、神奈川県の藤沢に住んでいた私は、とまどつてしまつた。しかし、実際に三島校舎へ足を踏み入れた私は「大学のキャンパスとは、何ときれいなのか」と新鮮な驚きを覚えたものである。この三島校舎での生活は、私にとって忘れられないものになつたのである。

学園紛争で中断されていた大学祭が、第二十回としてこの年の十一月六日から八日にかけて開催され、私は大学祭実行委員となり、広報を担当したのである。この大学祭のプログラムの中に、家政科の主催になる「リュウウビコスチームショーア」があり、どういう訳か、私もショーのお手伝いをすることになつたのである。着物を洋服の感覚で着るという、某女史主唱の着物ショーで、女子学生をモデルに作品を発表するという構成である。当日ショーが始まる寸

大学祭の思い出

浜田義之

思う。こんな自分でも、我が子のために一生懸命働き、そして母校の発展を祈ると共に、そこに本当の「ほこり」を感じる。

(昭45、法学部在学、神奈川県警秦野警察署)

追憶

東 賞 平



母校日本大学が三島に開設されやはやくも三十年、ときおり訪れる学園に今昔の感覚を覚えるのは、私一人ではあるまい。

木枯しの吹く冬、居眠りのできる夏、勤めを終え互いに語りあつて通つたあの学舎は、あれりし日の軍隊の名残をそのままとどめていた。しかも僅かといえ現役時代を、この兵舎で過ごした私は感慨ひとしお深いものがあつたのである。その学舎が、そしてその学園が、年毎に立派に変貌していくのを眺めては、母校の發展に心から祝福を送つてるのである。

戦時に中学時代を過ごした私は、先きの見通しも考えず父に反抗して、つい大学へ行かずに終つてしまつた。歳月がたつにつれそのことは寂しさともなり、またやるせなさともなつて自己を苛むようになつたのであるが、それと同時に、せめて日大に夜学でもあつてくれたならどれ程願つたであ

(昭26・27、商経科(二部)在学、税理士、沼津市議会議員)

らうか、それだけにその夢がかなえられたときの喜び、今もつて忘ることのできない大きな感激であった。

私は商経科二部の第二回生である。当時の学生のなかには高校を卒業したばかりの向學心に燃えた青年もいた。人生の半分を過ごし人情の機微をわきまえた年配者もいた。いうならば種々雑多な人々によって構成されていたのであるが、只一つ共通なことはいずれも働きながら通学する苦学生であつたことである。それだけに学生間には年令を超越した友情が芽生えだし、苦しみに立ち向う不屈不撓の精神が養成されたのも事実である。教授も我々苦学生の心情を深く理解せられ親切に教えてくれた。あれから二十五年、いまもつて玉津先生の門を叩く私にとって玉津先生は、まさに遙かなり二十五年である。

私が三島学園を卒業して、早くも五年の歳月が過ぎ去つたようです。在学中には、旅行好きで、旅行研究会の部長を任せられ、また、社交ダンスクラブにも席を置き、学友会の会計部長もやるといった具合で、勉学以上に忙しい学園生活を送つていたようです。もちろん大学祭などは、思い出深いもの一つであります。

学問以外に、大事な青春時代を身心と共に、思い切り打ち込めることができ、その中で多くの良き友を知り、すばらしき後輩たちに



いろいろな経験をもち、さまざまな仕事にたずさわつてゐる人々が、技術という言葉を口にするとき、おののそれなりに、技術について漠然としたイメージや、又は、かなりはつきりとした理解をもつてゐるであろう。しかし、科学技術の振興とか、技術の時代とかいう言葉が、ジャーナリズムにおいてはやされて、毎日のように目に触れる現在の環境の中には、我々は、この言葉にほとんど不感



技術とはなにか

症のようになつてゐる現代である。

(一) 何かを作り出す場合、その素

(二) 現実に何かを実現する行動がおこなわれ、その素材に働きが加えられること(加工)。

(三) 我々の判断によつて、目的が

我が良き友と後輩たち

久保田 博明

めぐり会えたことは、私にとってこの上もない喜びであり、ほこりにさえ思えるのです。

今でも、時々彼らと会い、そして酒などを飲み交わす時、何とも言いがたい気持ちになります。そして、走馬灯のようになつかつたあの頃が、思い出されるのです。

仕事の合い間にこの交遊が、人生の潤滑油となつて生活に潤いがで

き、明日の大重要なことなどはございません。

この三十年をひと区切りとして今後ますます三島学園が発展され、良き先輩方の伝統を受け継いで、りっぱな三島学園になることを祈るとともに、同窓会の一員として、事あるごとに微力をつくしたいと思っております。

(昭45・46、商経科在学、久保田

相田信次

決められること。

これらの認識の領域から、創造し現実の存在へと技術を形成してゆくうえにおいて、構想力がなりたつてきます。ゆえに技術とは、主観的には、目的を達する正しい途の術であり、客観的には、人間活動の領域内の、行為の操作及び補助手段の合理化された総体である。また、技術は自然法則の中から形成され、理論づけられます。

(昭44・45、機械科在学、相田電機)

秋によせて

有 村 夕 起 子



目の「近代文学散歩」で、郷里の九州熊本に旅行したり、又、中世文学では『平家物語』の『巴』の人物像に取り組んで『巴』に関する底本が、京都・東京の図書館にあると言わればコピーに出掛けたり、東京の能楽堂書店に本を求めて行ったり、よく歩きました。また、教育実習では、教える側に立ち、高校、中学生となるほど教えることの困難さが身につきました。そして、常に、教える教えられる立場が存在するから、教育実習は、私にとって、いい経験であり一番の思い出になっています。

今は、秋の真っただ中、越前岳の紅葉に、ホワイトボールが染つてしまふほどのフェアウェーの広い打ち下しのロングコース、又、薄化粧の富士山に、ボールが溶けてしまいそうな打ち上げのコース等々。ここが、私の勤め始めた後三ヵ月で一年になる十里木のゴルフ場です。就職後二年半の本社勤務を終えて、この十里木に勤めていますが、今だに、ゴルフのゴの字も理解できず、経理事務、雑用におわれています。

事務所の窓ごしの紅葉も、一層深くなりだしました。

今頃は、学生時代だと、大学祭準備の頃ですが、私には、これといった大学祭の思い出はありません。しかし、二年生の自由研究科



(昭46・47、国文専攻在学、十里木カントリークラブ)



友

へ

和 泉 久仁子



赤城おろしは冷たいかい?...。北

海道の彼女、山登りしているか

な。神奈川・静岡の彼女達、近い

ようで遠きかな?...。元気にやつて

いるかしら。富士山が恋しいと言

ってた彼女、その内必ずでつかい

生活のことがあれこれ話題とな

けれど、久しぶりに会うと、短大

に追われたことも楽しく思い出

され、試験の重たあーい圧迫感も

雲の上に置き忘れたように快く感

じたり!...。社会に巣立つた友、さ

らに学業へと進んだ友、そして家

庭生活を伴侶と歩み始めた友!...

まだ半年過ぎただけなのに、毎日顔をあわせていた彼女達に会えないと、なにかボソーンと淋しく、半年が大きな穴に思われる。季節が秋だからかな?...。そう言えば

寒くなるにつれ教室のヒーターが

思い出され、小さくやけどした感覚が指先に甦ってくるようで、思わず「アチッ」。

遠く九州へ帰つて行つた彼女、九州の冬はあつたかいかしら。愛媛の彼女、元氣かい? 輪島の彼女、日本海の冬は寒かろう。長野の山麓寒いかな?...。栃木の彼女、風邪ひかないように。群馬の彼女

に住む私は、近いというのに三島に遠くなってしまつて、今日はこれから原稿片手に、久しぶりに富士山を見て来ます。銀杏の葉っぱお元気ですか?...。

それぞれに違う道を歩き始めた季節も秋となりました。みなさんお元気ですか?...。

富士山の写真送ります。
富士おろしの吹く中、銀杏並木
も色づいた頃でしょうか?...。熱海

(昭49・50、英文専攻在学、家事)

俳 句



金 子 美 知 子

菊 薫る三十周年富士真白

学舎の壁の爪痕秋桜

人棲まぬ庭より採りぬ吾亦紅

秋の街小さき買い物母とゆく

曼珠沙華また逢はざりし夜の来る

在学中の思い出と私の近況

調理実習試験

兒玉理智子

(旧姓) 理智子



昭和五十一年も、あと二ヵ月余りとなりましたが、諸先生方、初め三島同窓生の皆様お元気でお過学園開設三十周年記念、誠にお目出度うございます。記念にあたりまして、原稿を依頼されましたが、私も時代の波にのり、ほとんど、電話で済ます生活に馴じんでしまい、書く事を忘れつつあります。私は、昭和三十四年、現在の家政科の前身である栄養科が設立された時の第一期生として入学致しました。短期大学部栄養科でしたので、二年間三島で過ごした訳ですが、思い出は尽きません。私達第一期生の一部は、寮生活をしましたので、寮監は小佐野先生でした。そして、寮監は小佐野先生でした。特産物が送られ、それをいたたいたり、私など、柿が大好物で、青い、ハイキング、そして、故郷の山久美子さんの実家から送られて

児の母親です。核家族のため、栄養士としての再就職を断念し、消費者運動のグループに入り、無添加食品、有機農産物、北海道から直仕入の牛乳、ＬＬ牛乳の問題等、家族や地域住民の健康につながる健康食品に、挑戦しています。

又、五年前からアメリカからの留学生を毎年お世話しています。私にとって、栄養科で学んだ事が基礎になって、自信と勇気をもたらし、いつまでも、身心共に健康でありたいと思っています。

して、後に言葉が出す、その一時限の長かったこと。「山本先生、あの時のことを御存知ですか?」。

来た柿を食べ過ぎて、お腹をこわしたりしました。寮の建物は大へん古く、泥棒さわぎ等もありました。又、時折吹き出してしまいうですが、山本先生の授業が、一時限にある日でした。寮生二、三人で登校中、「今日の山本先生の授業、休講にならないかなあ」と言ふ後で、「休まないよ」と、声をかけられました。私達、びっくり

主婦の友の付録なんてのにまで目を通してください。いろんな本を用いて課題ができます。

はかわいそらの春物者といへ
ところ。その時失敗しても、二度
目には挑戦しない。献立の変更又
無しというのだから、図々しいよ
のです。当日は材料を用意して、
小さな紙きれ忍ばせて試験に臨み
ます。人間の数がガス台、鍋等を
上まわり、しかも各自が違う材料
に取りくむのだから、察しはつゝ
でしょう。料理上手は片付け上手

お互いの自慢料理の試食会が始まります。早く終った人は、気軽にあちこちつまみ歩き、まだ製作中の人も負けずに一口。自分だけだと張切って作った箸なのに、同じような料理が、いくつかぶつかつたのは、あれはどういうわけだつたんでしょうね。

プログラミングとスイミング

育木榮

途中経過を報告すれば、いる
んな事がありました……』と何
かのコマーシャルではないが、短
大の専攻科目とは全く畠違いのコ
ンピューターによる事務計算のプ
ログラミングを仕事としている。
取引先のある大手の会社の従業員
と共に講習と実習を受け終了した
後は頭が飽和状態という感じであ
つたが、現在は一人立出来そうと
いう段階である。おもしろいこと

にコンピューターは人間の命令通り動き、人間の曖昧さを実に的確に指摘する。機械の偉大性と馬鹿な面を認識した次第である。

仕事以外として、学生時代に出来なかつたスポーツに夢中といつたらオーバーだが、この八月から市内のスイミングセンターで毎週日曜日水泳の手解きを受けているがどこまで進歩するか楽しみである。幼少の頃から水に入つてゐる

泳いでいる時の顔たるやひどいもので恋人には絶対に見せられるものではない。『現代人は運動不足』と言われているが、正にその通り。水泳中の顔相は少々みつともなくとも、わくわくおばあちゃんになつても、人魚の如く泳ぎまくり続けたいと思っている。

安藤みつ子

とか、友達だからなんてのは、
の時は通用しないのです。大騒ぎ
の末作り上げた作品を、先生に採
点（味見です）していただいた試

お互の自慢料理の試食会が始まります。早く終った人は、気軽にあちこちつまみ歩き、まだ製作中の人も負けずに一口。自分だけだと張切って作った筈なのに、同じような料理が、いくつかぶつかつたのは、あれはどういうわけだったんでしょうね。

第一期生の一部は、寮生活をして、寮監は小佐野先生でした。歓送迎会クリスマス・パーティ、ハイキング、そして、故郷の特産物が送られ、それをいたたいたり、私など、柿が大好物で、青山久美子さんの実家から送られて

(昭34・35、栄養科在学、主婦) 学生を毎年お世話しています。私にとって、栄養科で学んだ事が基礎になって、自信と勇気をもたらし、いつまでも、身心共に健康でありたいと思っています。

取引先のある大手の会社の従業員と共に講習と実習を受け終了した後は頭が飽和状態という感じで、つたが、現在は一人立出来そうとういう段階である。おもしろいこと

たらオーバーしたが、この八月から市内のスイミングセンターで毎週曜日水泳の手解きを受けている。幼少の頃から水に入っている

やんになつても、人魚の如く泳ぎまくり続けたいと思っている。

(昭34・35、栄養科在学、主婦)

いう段階である。おもしろいこと

る。幼少の頃から水に入っている

開設三十周年を祝う

同窓会記念事業



幹事会

本年六月十日開催の同窓会幹事会において、母校三島学園の開設三十周年を記念する同窓会事業を行いたい旨提案された。提案は、これより以前再三にわたり常任幹事会において検討された原案を、奥田副会長から説明した。長時間にわたり活発な討議がなされ、次の行事が決定された。

一、市民を対象とする行事として、同窓会員である北村和夫氏の所属する、文学座による

「ハムレット」の記念公演を行ふ。

なお、この行事は校友会三島支部と共催とする。

一、大学に対しグランドピアノを

文学座記念公演
日 時
十月六日午後六時～九時一〇分
場 所
三島市公会堂
主 催
日本大学校友会三島同窓会
協 賛
日本大学校友会沼津・田方・熱海各支部
内 容
文学座による『ハムレット』公演。

スタッフ
演出……木村光一
美術……石岡瑛子
照明……古川幸夫
音楽……池辺晋一郎
効果……深川定次
監督……三上逸雄
制作……浜博

キャスト

江守徹
坂口芳貞
太地喜和子
新橋耐子
ほか

利益金一〇万円

三島市福祉事業に寄付

入場券販売については当初心配されたが、販売をはじめると、予

(スタッフ・キャスト別項参考)

寄贈する。

二、同窓会報の特集号を発行する。

一、同窓会会員名簿(文科・家政科分冊)を発行する。

以上四つの行事のうち、文学座公演はすでに大成功のうちに終了し、会報・名簿もいよいよ発行となつた。ピアノの贈呈は来春一月に贈呈式を行うことに、すでに決定している。

公演はすでに大成功のうちに終了し、会報・名簿もいよいよ発行となつた。ピアノの贈呈は来春一月に贈呈式を行ふことに、すでに決定している。

「総務委員」西村満男、小出博、小早川隆義、相田信次、「涉外委員」柳下孝子、柴田正、土屋貞明、「会計委員」遠藤逸雄、「委員」高田菊平、瀬川一男、宮沢基人、鈴木邦良、「会計監査」石川貞夫

想外の人気であった。これは運よく各新聞がハムレット公演の好評を記事にしていた事もあるが、券の販売に当たった係員の協力によるところ大であった。当日は五時頃には公会堂前は長蛇の列が作られた。六時渡辺校友会支部長・種房同窓会長の挨拶に続いて、六時十分開演された。江守徹・太地喜和子等の熱演に満員の観衆は全く魅了されていた。九時十分予定通り終了したが、満足の顔をみて、係員は顔を見合せてにっこり。すべて満点のこの行事の成功に、一同さわやかな気持ちであった。

寄付の趣旨は、三島学園開設以来三十年間に、四万の三島学園出身者が三島市民に大変お世話をなつた。そのお礼の意味でわずかな金額であるが、三島市の困る人のためと贈られたものであるが、これにより我々の三十周年記念事業が更に一つ増えたことになつた。

ピアノ寄贈



三島同窓会発足以来、大学よりも多くの指導や援助を受けてきているが、この機会に四万余の同窓生の心をこめた記念品を、大学に贈呈することになった。委員の間でいくたびか協議の結果、ヤマハ「コンサートグランドピアノ C S II」に決まった。価格は一七〇万円である。

入場券

A席 二、三〇〇円 三七三席
B席 一、八〇〇円 五四八席

実行委員

委員長 渡辺郁(校友)
副委員長 奥田吉郎(同窓)
事務局長 角田義廣(同窓)

委員長 渡辺郁(校友)
副委員長 奥田吉郎(同窓)
事務局長 角田義廣(同窓)

に寄付することになった。十月二十五日、同窓会代表の遠藤・瀬川両氏が、三島市役所市長室において、福祉事務所長立合いで、長谷川市長に手渡された。

同窓会総会開催される

会長に種房繁氏を再選

が、午後五時三十分柴田正氏の閉会の辞で無事終了した。

同窓会昭和五十一年度総会は、十一月三日午後四時から母校記念館で開催された。

会は角田義廣氏の司会で進められ、長田涉氏の挨拶後、田村栄一氏を議長に選出し議事に入り、次の事項が報告・審議された。

一、前年度事業報告について
二、前年度決算報告について
三、本年度事業計画について
四、本年度予算について
五、役員選出について
六、規約一部改正について

なお、事業報告・計画は瀬川事務局長、決算・予算は土屋忠得会計幹事、監査報告は持田光雄会計監査よりそれぞれ報告が行われた。また、三十周年記念行事につ

いては奥田吉郎副会長より、文学座公演の会計報告は遠藤雄常任幹事よりそれぞれ報告が行われた。

続いて同窓会事務局強化のための規約改正が行われた。改正理由の説明は、角田義廣常任幹事より提案され万場一致可決された。

(改正規約は次号に掲載)

また、本年は役員改選の年であるので、改正規約に基づいて選出に入り、会長に種房繁氏を再選した。会長よりの指名で副会長には奥田吉郎氏を再選し、遠藤逸雄・東賞平両氏を新たに選出した。事務局長には瀬川一男を再選した。

短時間で重要議題が多かったた
じ会場に安藤先生を始め母校の先
生方をお迎えして開催された。宮



同窓会懇親会も盛大に開かる

沢主^{ミサキ}任幹事の司会で進められ、種房繁会長の挨拶、大学を代表して安藤公平先生のご挨拶、続

いて鈴木昇六先生の三十年の想い、出をまじえたご挨拶の後、同先生の音頭で乾杯し、なごやかな懇親会が七時過ぎまで続行された。

本年は三十周年とあって、古い顔ぶれが見られた。

恒例の日本大学三島大学祭は、三島学園開設三十周年を記念して十月三十一日から十一月三日まで盛大に挙行された。とくに本年は十余年ぶりの市中パレードが注目された。大学祭のシンボルテーマは、「年輪」—30年の歩み、そして前進であった。



第二十六回大学祭挙行される

大学祭主な行事

- 市中パレード
- 初日祭ファイヤーストームを囲んで
- フォーカ・ダンス
- パークーにちだい
- 佐良直美、ビッグショウ
- 落語、三遊亭円楽ほか
- 写真で見る三島学園のあゆみ
- 座禅会—静寂への原点—

指導 龍沢寺・伊万里梅城師
講演「志賀直哉と武者小路実篤」
早稲田大学教授 紅野敏郎氏

昭和50年度事業報告

1、奨学金の給付並びに同窓会長賞授与

昭和50年度日本大学文理学部(三島)在学生より、次の者が推薦された。短大関係は、3月24日の卒業式当日、学部教養課程関係は、4月10日の三島校舎開講式当日、それぞれ授与式が行われた。

奨学金 2名 佐藤 勝(法)、川田敏明(経)

同窓会長賞 6名 矢沢美佐枝(国文)、和泉久仁子(英文)、長谷川清教(商経)、谷崎和美(二部)、青山弘美(家政)、伊丹裕子(食栄)

1、学園歌集発行

学園歌19首を36頁に収め、5,000部を発行し、三島校舎新入生全員に入学祝として渡した。

1、会報発行

会報第5号50年7月30日発行 8頁 5,000部

会報第6号51年1月22日発行 8頁 5,000部

1、役員名簿発行

同窓会役員名簿を1月20日発行 部数 500部

1、会員名簿発行

会員名簿のうち、家政科・文科の編集が完了、印刷に入った。

総会並びに懇親会

11月3日15時30分から、総会並びに懇親会を、日本大学文理学部(三島)8号館で開催した。(会報第6号-1・2頁参照)

1、幹事会

7月2日18時から、日本大学文理学部(三島)本館小会議室で開催した。(会報第5号-1頁参照)

昭和50年度収支決算書

(昭和50年4月1日～昭和51年3月31日)

(単位 円)

支		出	収		入
項	目	金額	費	収	金額
奨学金	学園歌集発行費	64,560			
		195,000			
同窓会報発行費(2回)		210,200			
各科同窓会補助費(名簿発行補助を含む)		90,000			
総会並びに懇親会費		129,520			
会議会合費		73,770			
通信運搬費		60,405			
事務費		0			
雜費(消耗品、旅費、慶弔、雜費)		115,350			
予備費		0			
	計	938,805			
基	金		利	費	
次	年	緑	入	息	
年	度	入	取	収	
度		額	額	入	
		1,200,000			1,590,500
		168,244			536,830
	合	2,307,049			
				計	2,127,330
基	金				
前	年	取			
年	度	緑			
度		越			
		額			0
		金			179,719
	合			計	2,307,049

貸借対照表

(昭和51年3月31日現在)

(単位 円)

借		方	貸		方
項	目	金額	項	目	金額
普定	通期預金	647,744 8,500,000	基	前年緑入額	8,400,000 7,200,000 1,200,000
			本年緑入額	(51年会費)	579,500
			前受金	579,500	168,244
			次年緑入額		
	合計	9,147,744		合計	9,147,744

本決算書は証憑書類と照合の結果適正と認めます。

昭和51年6月10日

会計監査 持田光雄
中島みほ子

昭和51年度事業計画

1、奨学金の給付並びに同窓会長賞授与

日本大学文理学部（三島）を在学生のうち昭和52年3月に短大を卒業し又は学部教養課程で、移行する者を対象として行う。

教養課程（法、経、商、文理）…………各1名宛奨学金

短大各科（専攻別）……………各1名宛奨学金または同窓会長賞

1、学園歌集発行

昨年とまったく同じ内容で5,000部を印刷、新入生に渡す。

1、会報発行

会報第7号（11月中旬）発行 16頁 6,000部（30周年記念号）

会報第8号（12月中旬）発行 8頁 5,000部

1、名簿発行

本年は昨年編集の家政科・文科の分を発行する。また11月3日役員改選後役員名簿を発行する。

1、総会並びに懇親会

11月3日16時から開催する。

1、幹事会

6月10日17時50分から日本大学文理学部（三島）8号館において開催する。

<30周年記念事業>

(1) 記念品 ヤマハ「コンサートグランドピアノCSⅡ」を寄贈する。

(2) 記念行事 文学座「ハムレット」が10月6日（水）三島市公会堂で公演を行う。

昭和51年度収支予算書

(昭和51年4月1日～昭和52年3月31日)

(単位 円)

支		出	収		入
項	目	金額	項	目	金額
奨学費(30,000×3名 5,000×10名)		140,000	会費収入(500円×2,860名)		1,430,000
学園歌集発行費		200,000	利息収入		550,000
同窓会報発行費(2回)		400,000			
各科同窓会補助費(名簿発行補助を) 含む		500,000			
総会並びに懇親会費		250,000			
会議会合費		200,000			
通信運搬費		100,000			
事務費		50,000			
雑費(消耗品、旅費、慶弔、雑費)		150,000			
30周年記念事業費		1,500,000			
予備費		300,000			
計		3,790,000	計		1,980,000
基 金 繰 入 額		0	基 金 取 崩 額		1,700,000
次 年 度 繰 越 金		58,244	前 年 度 繰 越 金		168,244
合 計		3,848,244	合 計		3,848,244

—三島学園三十年の歩み—

呉総長・青木経済学部長三島の東海第十部隊跡視察
三島予科開校準備の事務所を「ひしや旅館」に設置

伊豆災害救援活動行わる。全日大体育大会優勝
短大栄養科（現在の家政科）開設

事務局だより

▼三島開設三十周年を一つの区切りとして、その記念特集号がこうようやく発行の運びとなりました。当初の企画は座談会なども入れてと思っておりましたが、ハムレット公演などが入り時間ががれず、思うにまかせぬ結果となりました。お忙しいところお読みください。

▼記念事業の一環である文学座公演『ハムレット』は、準備を始めから開演当日まで約二ヵ月間、忙しい日が多くありましたが、どうやら大きな赤字を出さずに済み、加えて出し物が好評だったことで苦労した甲斐がありました。また、この事業を通して校友会との交流が広く生まれたことは、大きな収穫でした。

▼同窓会活動は、その性格上どうしても消極的な形になりやすいわけですが、毎年十一月三日になりますと、なつかしい方々のお顔も見られ、事務局活動の意義をあらためて感じさせられます。常任幹事の皆さんと共に、友好と寛容とフェアプレーの精神をもって期待に応えたいと思います。

▼記念特集号に統いて、第八号を発行すべく準備に入ります。原稿等の協力、よろしくお願ひいたします。

会員の消息、めずらしい話題など、お互いの関心を高める意味で記事をどしどしお寄せ下さるようう、お願ひいたします。